

## 最近の症例から (7) ——Papillomatosis——

村田智明, 上松隆司

松本歯科大学 口腔外科学第2講座 (主任 山岡 稔 教授)

安東基善

松本歯科大学 口腔病理学教室 (主任 枝 重夫 教授)

患者: 51歳男性

初診: 平成元年2月14日

主訴: 口腔底部の異和感

家族歴, 既往歴: 特記事項なし

現病歴: 昭和63年3月頃より左側口腔底部に異和感を覚え, 同部に白色の小腫瘤を認めるようになったが放置していた. 平成元年2月, う蝕治療のため某歯科医院を受診した際, 同腫瘤を指摘, 当科へ紹介され来院した.

全身所見: 特記すべき事項なし

局所所見: 顔貌は左右対称性. 顎下リンパ節は両側に小豆大のものを各1個触知し, 可動性で圧痛

は認められず顎部リンパ節の腫脹も認めなかった. 口腔内所見としては, 左側第2小臼歯相当部から顎下腺管開口部に至る口腔底部に白色, 広基性, 乳頭状ないし疣贅状の腫瘤を認め, 周囲との境界は明瞭であった. 硬度は周囲粘膜よりやや硬く, 圧痛や周囲の硬結, 唾液の分泌障害などはなかった. また, 左側下顎臼歯の舌側転位や鋭縁なども認めなかった (写真1).

臨床診断: oral florid papillomatosis

処置: 平成元年2月23日, 局所麻酔下にて切除術を施行.

病理組織診断: papillomatosis (写真2).

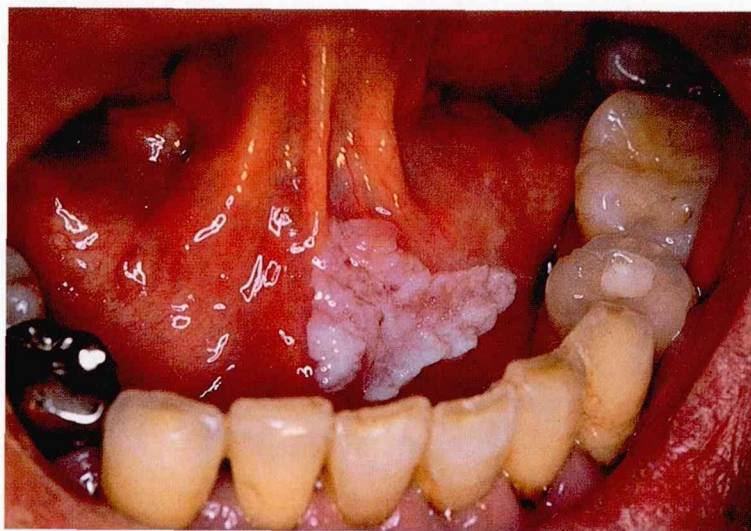


写真1

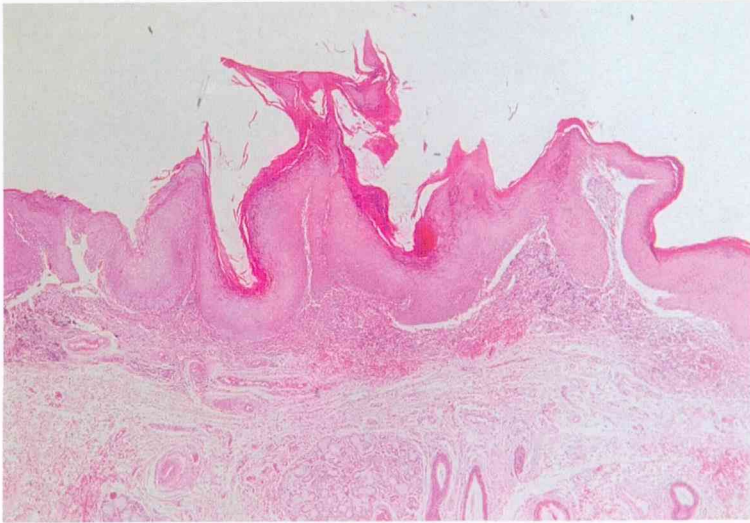


写真 2